

# エンカウンター（ENCOUNTER）

## 第 83 号

平成 21 年 3 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

ウィリアム・バークレー

「希望と信頼に生きる ウィリアム・バークレーの 1 日 1 章」

（柳生直行訳・ヨルダン社）より（10）

### 9 月 5 日 すばらしい瞬間（1）

わたしたちは、その昔ジョン・ノックスが説教したことのあるすばらしい礼拝堂から、朝の祈りを終えて、出てきたところであった。美しい七月の朝であった。青い空には雲ひとつなく、夏の熱い太陽が緑の芝生と花壇の色とりどりの花々に、あざやかな光を注いでいた。朝の講演のために講堂にむかって回廊を歩いていたとき、ひとりの婦人がわたしのほうを振り向いていった。「今時計の針を止めることができたらいいのに、と思いますわ」。

あまりにもすばらしい夏の朝だったので、彼女はそのまま時間の流れを止めてしまいたいと思ったのだ。これは誰にも経験のあることだろう。時間が止まって、いつまでもこのままであればいいと思う幸福な瞬間。

しかし、どんなにすばらしい瞬間でも、それが永遠につづくとしたら、その魅力は失われてしまうだろう。人生の喜びは同一性ではなく、対照のうちにあるからである。...

眠りがありがたいのは疲れがあるからである。

心も身体も休息を求めるのは労苦があるからである。

友情に価値を与えるものは孤独である。

陽光をよるこばしいものにするのは雨である。  
夜明けがすばらしいのは夜の闇があるからである。  
再会がうれしいのは別れがあるからである。  
労苦のあとの眠り、あらしの海のアとの港  
戦いのあとの休み、生のアとの死、これほど楽しいものはない。  
人生に悲哀と栄光を与えるもの、それは光と闇との対照である。  
どんなにすばらしい瞬間でも、それが永遠につづいたら、いつも同じで飽きあきしてしまうだろう。ちょうど、1年中日が照っている国に住む人が、ついには雨にあこがれるであろうように。

## 9月6日 すばらしい瞬間(2)

人生を人生たらしめているのはその万華鏡的な性格である。

シェレーが有名な比喻をもっていっている通りである。...

人生が一種類だけの経験で成り立っているとしたら、人生を人生たらしめる特質は消えてしまうであろう。人生が悲しみと喜び、楽しみと嘆き、笑いと涙、沈黙と歌によって織りなされているからこそ、人生は人生でありうるのである。人生の内容に充実を与えているものは、その色とりどりの織地なのである。

涙を知らない人生は、無限の価値をもつあるものを失った人生である。「日照りつづきは砂漠をつくる」といわれる通りである。悩みを知らぬ人生、疑いをもったことのない信仰、ぜいたくと安楽だけしか知らぬ生活、こういったものは、無限の価値を持つある肝腎なものを、悲しいまでに、欠落させてしまっている。

ある瞬間がどんなにすばらしいとしても、それはたえず変わる生の万華鏡の一部だからこそ、またそれが瞬間であって永劫の状態ではないからこそ、すばらしいのである。

どんなに望んだとて時計の針を止めることはできない。

人生は進まねばならず、瞬間は過ぎ去らねばならない。とはいえ、瞬間は全く過ぎ去ってしまうのではない。それは記憶として蓄えられたものの一部となるのである。

すばらしい瞬間は記憶として蓄えられる。そして、人生がわびしくきびしいときに、われわれはそこに戻って行って、暗い日を生きるための陽光と力とを見出すことができるのである。人生は立ち止まることも後退することもできない。すばらしい瞬間を捕えて釘付けにすることはできない。できたとしても、それはわれわれにとっていいことではないだろう。だがそれを記憶のうちに蓄えて、永久に所有することができる。暗い日に自分のベテルに戻って行って、神に会うことができるのである。(創世記 28・19)

注 ベテル ヤコブが天へのはしごの夢を見た場所。参照 讚美歌 320

9月18日 親 切

他者に対しては、欽定訳聖書の言う「慈悲」がクリスチャン生活の特徴とならねばならぬ。

「慈悲」にいちばん近い現代のことばは、たぶん「親切」であろう。クリスチャンはその判断、話し方、また行動において親切でなければならない。人を悪く思い、人の行動を悪く解釈するのが、世のならいだからである。

相手を傷つける残酷なことを口にし、他者への親切など考える暇もなく、自分のことばかり考えるのが、世のならいである。だがクリスチャンの解釈とことばと行為とは親切でなければならない。

自己に対しては、謙遜がクリスチャン生活の特徴とならねばならぬ。

世の中に、うぬぼれほどありふれたものはない。たいていの人自己満足に陥っている。謙遜とは、実は、自分を消してしまうことである。自分を消してはじめて人は学ぶことができるようになる。学ぶということの第一前提は、自己の無知を認めることだからである。とりわけ、自己を消し去ったときにはじめて、人は奉仕というものの美しさと必要とを真に知り、他者に仕えられることにではなく、かえって他者に仕えることのうちに人生の本質があることを、発見しうるのである。世間の人びとは自分のために他者を利用しようとする。これに反してクリスチャンは、神の目的のために、使われたいと願うのである。

死に対しては、確信がクリスチャン生活の特徴でなければならぬ。

…死が訪れるとき、多くの人々は悲しみに打ち沈み、完全にくじけてしまい、恨みつらみに生きるだけとなる。残ったものは思い出だけ、何の希望もない、といった状態に陥る。

クリスチャンとは、人生のはげしい戦いのさなかにあってもなお、生も死もわれらの主キリスト・イエスにおける神の愛から、われわれを、またわれわれの愛するものたちを、引き離すことはできないのだ、と確信している人間のことである。

## 9月27日 勇 気

...聖書では「歩き回る」ということに二つの種類がある。サタンは地をゆきめぐり、あちらこちら歩きまわってから、神の子たちの集まりにやってきた(ヨブ記1・7)ペテロの手紙によれば、悪魔は食いつくすべきものを求めて歩き回っている(ペテロ第1,5・8)これに反してナザレのイエスは、善きわざをなしつつ歩きまわられた、といわれている(使徒行伝10・38)

この二つの場合は、相対立する両極のようなものである。悪魔は食いつくすべきものを求めて歩きまわり、イエス・キリストはよきわざをなしつつ歩きまわられる。

賀川豊彦はある詩のなかで、「ただ歩きまわる」といっているが、実際は、いわば絶対的に、ただ歩きまわるということは不可能である。つまり、人間というものはかならず、なんらかの影響力をもち歩いているものなのである。街で会うすべての人に すれ違う人びとにさえ 何らかの影響を及ぼしているのである。

人々をはげましながらあるきまわることができる。

「彼は人々を励ました」 これ以上にすばらしい墓碑銘を望むことはできない。「しっかりしなさい! 元気を出しなさい!」 これはしばしばイエスの唇にのぼったことばであった。欽定訳は「心やすかれ!」と訳しているが、意味は全く同じである。

「しっかりしなさい!」とイエスは中風の男に言った(マタイ9・2)「しっかりしなさい!」と彼は、群衆の中から彼に近づいてその衣におそるおそるさわったあの女にむかっていった(マタイ9.22)。「しっかりするのだ!」と彼は湖上のあらしに恐れをなした弟子たちに行った(マタイ14・27)。「しっかりせよ!」と復活のキリストはパウロにエルサレムで迫害され、絶望するほかないと思われたときにいった(使徒行伝13・11)

だれにせよ自分の同胞を勇気づけるものは、主の足跡に従っているのであり、また主の声をもって語っているのである。

## 9月29日 召使で女王

...母親が各家庭の支配者であることについては、それなりの理由があるのである。

母親はもっとも大事なことに関わっている。

大事なことはすべて単純である。食事、健康、温かさ、家庭の安楽 これらはみな母親の手の中にある。それはいちばん骨のおれる仕事である。終ることのない仕事である。もし女たちが一日8時間、一週5日の労働を欲し、それを超える家庭の仕事に対して超過勤務手当を要求したとしたら、たいへんなことになるだろう。...

フェイ・フォーチュンは...女の仕事についてこう書いている。

なべとかまと万物の主よ、  
わたしは美しいことをやって  
聖徒になる暇がありません、  
一晩中あなたと語ることも、  
夜明けに夢を見ることも、  
天国の門を襲うこともできません、  
食事の支度、皿洗いをやることで  
わたしを聖徒にしてください。

この祈りは必ずや答えられるであろう。

当然のことながら、子供たち、特に幼い子供たちにとって、母親ほど大事なものはない。

小さな子供にとっては、世界は母親を中心に動いている。父親は仕事の性質上、家にいないことが多い。母親は、仕事の性質上、いつも家にいる。だから母親は、他のだれよりも、子供にとって必要である。家の中であって、イエスのことばは特に真実性をおびてくる。「あなたたちの間で偉くなりたいたいと思うものは、仕える人となりなさい」(マルコ10・43)。人間生活における家庭の比重は重く、妻であり母であることは、労働者であると同時に社長であることであり、またみんなの召使であると同時にみんなの上に立つ女王であることなのである。

## 10月1日 アブラハムの子(1)

真のアブラハムの子は、謙虚な知性の持ち主でなければならぬ。

謙虚な知性が絶対に必要なのは、謙虚さがなくてはなにごとをも学ぶことができないからであり、また自分は無知であるという認識がまずなければ、なにかを学ぶということはありませんからである。すでに答を全部知っているという人は、なにも学ぶことができないだろう。

ものを学ぶには謙虚さが必要だが、それはたいへん貴重であると同時に、はなはだむずかしいものである。それは事実の前に立って、事実をありのままに見るといふ謙虚さである。...

ものごとをありのままに見る謙虚さを持ち、自分勝手な見方をする傲慢さを捨てたとき、はじめて知識を得るための準備ができたのである。

謙虚な心の持ち主でなければならない。

謙虚な心なしには人間関係の問題を解決することは、誰にもできない。謙虚さがなくては次の二つのことが不可能となるからである。

- 1 謙虚な心なしには、奉仕のうちに美を認めることができない。
- 2 奉仕と傲慢とは互いに矛盾する。奉仕と謙遜とはほとんど同義語である。

奉仕する人こそもっとも偉大な人間である、ということを知っているのは、謙虚な心の人だけである。しかも彼は偉大さなど念頭に置くことなく、ひたすら奉仕するのである。

かくして、良い眼、つまり寛大な目はわれわれにものを正しく見る秘訣を教えてくれる。謙虚な知性はものを正しく学ぶ秘訣を教えてくれる。そして謙遜な心は正しい人間関係の秘訣を教えてくれるのである。

この三つは祈り求めるに値するものではなからうか。

## 10月2日 アブラハムの子(2)

アブラハムは神の友であった。ユダヤ人にとって最高の賛辞は、あの人は真のアブラハムの子である、ということであった。ユダヤ人の言い伝えによると、真のアブラハムの子は三つのものを持っていなければならなかった。「良い眼と謙虚な頭とへりくだった心」

この三つである。

良い眼をもっていなければならぬ。

ここで「良い」といっているのは視力のことではない。寛大な眼のことである。だから善人は寛大な目をもって人びとを見る人間である。

惜しみなく人をほめること。

この世には批評家が多すぎる。不足しているのは「激励家」である。イギリス海軍にはこういう規則があった。「士官は他の士官に対しその義務遂行に関して落胆させるようなことをいってはならない」。仲間のを励まし勇気づける人以上に大きな奉仕をなしうる人は、いないのではないかと思う。

惜しみなく与えること。

人が助けを求めざるをえなくなるまえに、その人の必要を見てとることのできる感受性 世にこれほど尊いものはない。他者の必要を敏感に見てとり、すばやく助けてやることは、その人の偉大さを示すものである。

寛大に見のがしてやること。

欽定訳のなかの最も驚くべき文章の一つは、神が無知の時代を見過ごしたもうた、という文章である(使徒行伝 17・30)。神はその慈悲ゆえに、無知であった時代の人々の罪と失敗に対して、眼をつぶられたというのである。

よく見ることも賜物だが、ときに目をつぶることも賜物である。賢い人はなにを見るべきか、なにを見るべきでないかを知っている。

見えない眼が見える眼と同じくらい尊い、そういうときもあるのである。



10月11日 作ることは喜びである

ほとんど例外なしにだれにでも作れるもの、少なくとも他者との協力によって作れるものがいくつかある。

家庭を作ることができる。

ロバート・バーンズの詩にこうある。

おさなごと妻のために  
幸せな炉辺を作る、  
これこそ人生における  
心を打つ気高いしごと: B B

友達を作ることができる。

ヒレアー・ベロックの次の詩は...、私の大好きな詩なので、もう一度ここに引用させていただきたい。

しずかな家庭からはじまって  
未知なる世界の果に至るまで  
労苦して獲得するに値するものは  
友人たちの愛と笑いのみである

「友人をもつものは自分も友好的でなければならない」と、古いことわざに言う。いい友達になるために努力しない人は、いい友だちをもつことはできない。

人格を作ることができる。

ウォルター・スコット卿が若者であったとき、ある事故に会い、そのためいつもの仕事ができず、古いスコットランドの物語や歴史ばかり読んでいた。それを見ていた彼の古い友人が、あとでこういった。「あのころ彼は自分を作っていたのだ。彼自身はずっと後になってからそのことに気がついたのだが」。

われわれは、「なぜ神は私をこんな目に会わせたもうのか」といってはいけない。「このことによって神はなにをわたしにやらせようとしておられるのか」と問うべきである。

ものを作ることには喜びがある。われわれは家庭を作り、友だちを作り、自己の人格を作ることができるのである。

10月18日 親切心

親切であることは賢いことよりもつねにすぐれている。

このふたつは互いに相容れないというのではない。が相容れない場合が多いこともたしかである。

チャールズ・キングズレーは、こう歌っている。

かぐわしき乙女よ、善女であれ。

賢女たることは人に任せておけ。

美しきことをなせ、ひねもす

夢みているはならぬ。

かくして生と死とかの永遠を

一つの大なる甘き歌とせよ。

つぎのような忠告を与えたのも、同じ詩人だったと思う。

手近にある仕事からやれ、

たとい初めはつまらなくとも。

びっこの犬に出会ったら、

助けて垣根を越えさせてやれ。

世間は聡明な人々をほめそやすが、親切な人を愛してのだ。人の聡明さが忘れられてしまった後も、親切な行為はいつまでも思い出の中に生きつづけるのである。

ジョン・E・マクファディエンは、私とその指導を受ける名誉に預かった、最もすぐれた学者の一人であった。彼は私と同じ世代の多くの人びとにヘブライ語を教え、また旧約聖書のすばらしさにわれわれの眼を開いてくれたのであった。しかし、われわれがかれ「ジョニー」を覚えているのは、その学識の故でない。彼のキリストにも似た親切心のゆえに、われわれは彼をいつまでも忘れないのである。

...こういうことを考えると、イエスのつぎのことばを思い出さざるを得ない。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さいものの一人にしたのは、すなわち、わたしにしたのである」(マタイ 25・40)